

宮澤賢治の詩と童話に関する研究—身体性をめぐる表現を中心に

何 洪叡

北海道大学 大学院文学院

映像・現代文化論研究室



未来社会のあるべきかたち

- ◆ 人文学の視点から、多様性を尊重する未来社会の実現へ
- ◆ 宮澤賢治文学の新たな価値を発信し、文化の継承に寄与

研究背景

◆ 宮澤賢治の膨大な研究史は、詩と童話の研究がジャンルごとに行われてきた

- ・ 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』（1968）
- ・ 西成彦『森のゲリラ 宮沢賢治』（1997）

◆ 「心象スケッチ」と童話の方法である歩行、視線など身体に関する表現の問題が十分に考察されてなかった

- ・ 天沢退二郎 詩法と歩行 （1973）
- ・ 見田宗介『宮沢賢治—存在の祭りの中へ』（1984）
- ・ 吉本隆明「様々な視線」（1989）

◆ 作品に頻出する出所の不明な複数の 声をめぐる表現が看過されていた。詩「青森挽歌」



研究概要

本研究では、初期散文、『春と修羅』第一集・第二集、童話集『注文の多い料理店』、後期童話を対象とする。「歩行」「視線」「声」という三つのキーワードを手がかりに、詩と童話に共通する身体表現を明らかにするとともに、両者のつながりを考察する。さらに、「心象スケッチ」を含む宮澤賢治の創作方法を作品分析を通して再検討し、宮澤文学を統合的に捉える新たな読解の枠組みを提示する